

学徒出陣七〇年に想う

辻野 喬雄

一 はじめに

今年に学徒出陣から七〇年、わだつみ像建立から六〇年に当ります。

一九四三（昭和一八）年一〇月二日、秋雨けむる東京・神宮外苑での水しぶきをあげて進む学徒の分列行進の姿は、軍楽隊の演奏する「敵は幾方ありとも 総（すべ）て烏合（うごう）の衆（しゅう）なるぞ」の曲と共にテレビでもよく放映されますが、彼らを待ち受けている運命を思う時、涙なしには見る事ができません。

この学徒出陣は、太平洋戦の退勢挽回のため突然決められたかのような印象ですが、既に日中戦争（一九三七年盧溝橋事件より）の中にその底流があったことを、私の兄の卒業くりあげ（公用語は在学年限の短縮）の思い出を交え、たどってみたいと思います。

二 兄の思い出

私の兄は一九一八（大正七）年生まれ、私より一五歳年上でした。

旧制第六高等学校（岡山、以下六高と略す）の蹴球部（当時の名称）に属し、三年生の一九三九年一月インターハイで全国優勝しています。六高同窓会は創立百周年より創立記念祭に戦没者の追悼式を加えることとなり、資料収集がおこなわれ、記念祭には遺族も案内され、私は出席を続けています。

岡山県立朝日高等学校々庭の東北隅に赤煉瓦風、不等辺三角形の屋根の二階建て、立派な同窓会館があり、その一階に略歴の付記された遺影がずらりと掲額されています。

二〇〇〇年一〇月創立百周年記念祭で配布された資料では、戦没者一七〇人、略歴明記九四名、学徒出陣は一四名でした。（二〇一〇年現在戦没者二三〇名、略歴未整理）

創立記念祭には前後して各部・クラスなどの小集会在が企画され、私も蹴球部OB会に参加し、当時一年生で兄と一緒にインターハイ優勝を味わったというお二人とお話することが出来、インターハイ主催の京都大学に残っていた毎年の優勝校の校名・選手全員の毛筆寄せ書の写しも

見せていただき、感激の極みでした。

兄は京都大学工学部（建築学科）へ進み、一九四二年三月卒業の予定でした。しかし在学年短縮の第一号で一九四一年一二月末、三ヶ月短縮で卒業、一旦就職し、翌年二月一日に召集されています。その後陸軍幹部候補生となり、ソ・満国境（当時）のハイラル近くで地下壕建設に当たっていたようですが、一九四四年七月下旬突然帰宅し、夜行列車で門司港へ、そしてフイリピンへ渡り、公法では一九四五年二月二十五日マニラ東方で戦死となっています。

わが家は一九四五年六月二九日の岡山大空襲で全焼し、兄の遺品一切を消失してしまいました。そこで私は二〇〇〇年九月、京都大学建築学科同期の方を中心に兄の思い出調査をおこないました。大学で別れて五九年、齢八〇余の方々がかりにも拘わらず多くの方々から温かいお返事をいただきました。その中で、卒業くりあげに触れた方の手紙を要約紹介致します。

「三年生の夏休み、現地実習を終えて大学へ戻ると、君ら三ヶ月卒業くりあげ、直ちに卒論

の卒業設計に着手するよう指示され、びっくりした。当時京都では米飯は出ず、大津では出るということで、大津で頑張りスタートクラス会を開いた。」としてその時の集合写真も同封されていました。集合写真には、黒の詰襟学生服を着た学生全員一五名と着物・袴の先生と思われる男性一人、それにお店の女性三人が写っていました。

三. 国の方針

一九三七年の日中戦争以来、徴兵の範囲は次第に拡大されていきました。兵役法によれば、一般男子は二〇歳になると兵役の義務が課せられていましたが、勅令により、大学の学生、大学予科、高等学校、専門学校等の生徒は、卒業まで兵役の徴集を延期されていました。太平洋戦争直前、下級将校の増員の必要性を理由に、次の措置がとられています。

昭和十六年十月十六日
勅令第九百二十四号（官報号外）
（前略）六ヶ月以内之ヲ短縮スルコトヲ得

昭和十六年十月十六日
文部省令第七十九号（官報号外）
（前略）昭和十六年度ニ於テハ（中略）三ヶ月之ヲ短縮ス

昭和十六年十一月一日
文部省令第八十一号

（前略）昭和十七年度ニ於テハ（中略）六ヶ月之ヲ短縮ス

日本の敗色が次第に濃厚になりつつあった一九四三年一〇月二日、「在学徴集延期臨時特例」が公布され、徴兵猶予は停止されました。

同年一二月二四日、勅令により徴兵年令は一九歳に引き下げられています。

こうして理科系、教員養成学校以外の生徒は同年一二月陸海軍に入隊しました。この状態は終戦まで続いています。

一九四三年には、朝鮮・台湾出身の学生にも志願制をたてまえに学徒出陣が事実上強制されています。

ここで、二・項で紹介しました「夏休み、現地実習から帰って、三ヶ月卒業くりあげを聞いた」ことと文部省令が一〇月一六日であったこととにズレがありますが、今となつては検証は困難と思われます。

四. わだつみ像の建立

一九四九年一〇月二〇日、東京大学協同組合出版部から、戦没学生の手記（遺言、手紙、日記など）が、『きけわだつみのこえ』の書名で刊行され、大きな反響を呼びました。

その刊行収益で「わだつみ像」の制作が計画され、「戦争中に手が血にまみれていない芸術家」として、一九五〇年一月本郷新氏に制作が以来されました。

一九五〇年四月二二日、戦没学生記念会が発足、その席上で本郷氏より男子裸像でいく考えが披瀝されました。

一九五〇年六月、映画「きけわだつみのこえ」（東横映画、関川秀雄監督）が完成。

一九五〇年六月二五日、朝鮮戦争勃発。
一九五〇年八月一五日、わだつみ像完成。

像の設置場所については、南原繁総長に東京大学構内にと申し入れされましたが、一月四日の評議員会で否決され、本郷氏のアトリエ（東京）に置かれたままとなっていました。

敗戦後立命館大学総長に就任された末川博氏は、教学権の確立・教授会の自主性など「学園刷新要項」を決定して新生・立命館をめざしておられました。そうした取り組みの中で、一九五一年一二月八日の「全立命館戦没学生追悼慰霊祭」において「わだつみ像」の立命館への受け入れが決議され、末川学長は「わだつみ像」の引き受けを表明されたのでした。

一九五三年一二月八日、「わだつみ像」は東京から立命館大学に到着、一日には「わだつみ像」をのせた軽トラックを先頭にして末川総長はオープンカーで、その後には学生達が続いて

京都市内をパレードされたということです。

そして同一二月八日、太平洋戦争開戦の記念日に除幕式がおこなわれました。

本郷新氏は除幕式でのあいさつで『わだつみの声』を具象化するには、金ボタンの学生姿にはなれず、といってポロポロの軍服を着た死に瀕する兵隊でも物足りない。一人の美しい肉体をもった青年の裸体の中にすべてを内包させようという考えに落ち着きました。」と語っております。

像の台座には、末川総長の碑文が書かれています。

なげけるか いかれるか はた もだせるか
きけ はてしなき わだつみの声
この戦没学生記念像は広く世にわだつみ像として知られている。

一九五三年十二月八日

立命館大学総長 末川 博

一九六九年五月二〇日朝、学園紛争のさなか、「わだつみ像」は暴力的な集団によって引き倒され破損しました。

その後経過あって、一九七六年五月二〇日衣笠山の麓の立命館大学中央図書館二階に再建され、一九九二年五月二〇日には立命館大学国際平和ミュージアム内に設置され、一般公開され今日に至っています。

五. むすび

学徒出陣という衝撃的なことが、太平洋戦争敗色濃くなる中で、突然きまったことではなく、泥沼化しつつあった日中戦争の時期、一九四一年一〇月一六日に「在学年限三ヶ月短縮」がスタートし、「六ヶ月」に拡大され、

遂に一九四三年一〇月二日、学徒の徴兵猶予が停止され、学業中途であろうとも二〇歳になれば徴兵となつていったことを紹介してきました。

若き知性に満ちた学徒が、日中戦争・太平洋戦争に臨むに当り、いかに嘆き、怒り、悶えていたかは『きけわだつみのこえ』の本に凝縮されており、「わだつ

み像」に具象化されています。

それは現行憲法に見事に生かされていると思うのです。

この事を改めて、かみしめたいと思います。
(つじの たかお)

〈おこわり〉

公用語では、大学は在学、それ以外の大学予科、高等学校、専門学校、実業専門学校は修学ですが、本稿では総て在学としています。

〈参考文献〉

- ・大南正瑛・加藤周一『わだつみ不戦の誓い』一九九四年、岩波ブックレット
- ・中村克郎『わだつみ像縁起』一九九三年五月。
- 『立命館平和研究』第一二〇一〇年、佐藤広也(報文)
- ・立命館大学国際平和ミュージアム二十年のあゆみ』第八章資料編。二〇一二年

